

ゆる異形式抜歯鉗子と、古記録にみえる鉗との相関、ならびにその源流を追求する目的で、古代インドのシュルタについて、大地原訳本と伊東訳本とを対比しながら、手術用器械、特に鉗子類、鑷子類などについて調べた。

ヤントラ即ち手術用器械は101種。その使用目的は、体内に入り、身体に宿って、苦痛を与える異物を除去することである。またそれらは機能によって、鉗子類、鑷子類または挟み具類、顎状または鍵状、管状、棒状、補助的と6種に分類されている。鉗子類は獣類鳥類の口嘴に似た形状で、両頭のトメ金でとめられ、頭部は鉤状に彎曲している。しかも、鉗子類はその使用法演習の記述から、わが国の鉗との相関は充分考えられる。但し、伊東訳本で抜歯鉗子とされているダンタジャンクは、大地原訳本では除石器となっている。

13. わが国における口腔外科史 (第1報)

—特に、兎唇、口蓋裂小史について—

日本大学歯学部・日本大学松戸歯科大学

新国 俊彦 谷津 三雄
金子 賢司 鈴木 邦夫

本間玄調著、「瘍科秘録」の兎欠の項に「名ハ病源候論ニ出ツ、淮南子ニハ欠唇ト云ヒ博物志ニハ唇欠ト見ユ。本邦ニテハ「イクチ」トモ、又「ハツクチ」トモ云フ。其形状ノ兎唇ニ似タルユエ兎欠ト名ツケタルナルベシ、妊娠ノ時ニ兎肉ヲ食ヒ或ハ兎ヲ見ル時ハ其兒必ス欠唇ヲ患ウト…」とあり、その術式や麻酔法などにつき詳記されている。また伊良子光顕著、外科訓蒙図彙の「欠唇之部」；此症金創ノ類ニアラストイェトモ療法大抵金創ニ相似タリ故ニ此ニ記ス。右此書ニ著ス所ノ欠唇ノ治法ハ其大抵ヲ記スノミ、今吾家ノ伝ハ別ニ口授秘訣アリ、此書ニ著ス所ノ療法ト大ニ異ルコトアリ、其門ニ入ルニアラザレバ決テ口授スルコトヲ不許、予カ門人ニ於テモ其大旨ヲ得ル者纔ニ二三輩ノミ」、又中村完瑛著、紅毛外科書の欠唇の治験例に「予、療治シ、二十日ニ平癒ス、但、仕掛口伝アリ」とあって、その術式は記載されていない。これら古医書にみられる記録から、

兎唇、口蓋裂の術式と麻酔法について述べたい。

14. わが国の麻酔法と麻酔剤のあゆみ (第8報)

—クロロホルム麻酔小史の補遺—

日本大学歯学部・日本大学松戸歯科大学

鈴木 勝 新国 俊彦
谷津 三雄 鈴木 邦夫

クロロホルム麻酔は、ポンペに師事した伊東玄朴が1861年(文久元年)6月3日、江戸吉原の由次郎の右足切断に用いたのが最初といわれ、次いで1867年(慶応3年)9月、ヘボンが名優沢村田之助の脱疽に対し、クロロホルム麻酔下に右足切断術を行ったことになっている。しかし、この田之助の手術に対しクロロホルム麻酔を使用したことについて、横浜市史稿風俗編にはなんら麻酔剤を用いずに手術を行なったとし、それに対し高谷道男氏はその著、ドクトルヘボン(牧野書店、1954年刊)の中で、「平文先生のようなアメリカの名医が麻酔剤を用いないとは考えられず、明治事物起源にある通りコロロホルムを用いたというのが正しいと思う」としてある。又、クロロホルム麻酔から局所麻酔の移行期に関する発表から、これらクロロホルム麻酔に関する二三を追加し、クロロホルム麻酔史の補遺としたい。

15. 日本における臨床検査のあゆみ

日本大学松戸歯科大学

白土 寿一 谷津 三雄
大竹 繁雄 吉田 正昭

戦後急速に進歩した医学分科のなかに臨床検査学があり、歯科大学や歯科衛生士学校など歯学教育においても、この臨床検査がカリキュラムのなかに含まれているのみでなく、歯科大学附属病院における中央検査科は、口腔所見と全身の疾患との関係、又全身疾患の早期診断としての口腔内初発所見などの解明に、重要な役割をはたしている。しかし臨床検査史についての報告は少ない。そこで今回はこれら臨床検査学の歩みを、日大松戸歯科大学に蔵する医書や雑誌より調べ報告したい。まずわが国で最初の生(医)化学書は、